慈濟

ものがたり

ツーチー　2019年10月　*274*

九二一 特別展示会

九二一大地震が發生すると、證厳法師は直ちに台中に出向いて陣頭指揮を取り、災害支援の方向を指示した。ある日、視察に出かける前にボランティアたちに開示した時、話すことはいっぱいあったのに、どこから話したらいいのか分からず、悲痛な思いで「悲しみ極まり言葉も出ません」とだけ言った。

その歴史的な出来事が発生した場所は、民権路の旧慈済台中支部で、法師はそこで数多くの「慈悲」から出た意志決定を行い、ボランティアを導いて世紀を跨ぐ災害復興建設を行った。二十年前、九二一災害支援の指揮センターがその支部に設置され、全世界からの大愛をリレーする場にもなった。二十年後、そこは文史館として甦った。この機会にどうか展示会を訪れてほしい。タイムトンネルをくぐるかのように、当時の台湾の愛のエネルギーを感じとれるはずである。

目次

【社論】
危険な水の上の情け深い渡し船　慈願／訳　4

【主題報道】
悪夢の洪水からの再建　慈愈／訳　8
残された人は、精一杯生きるべき　葉美娥／訳　20
モラコット台風の被害　慈済の動員　善耕／訳　29
生まれて初めての水　有田夏子／訳　34
手提げバッグを縫うことは願を掛けること　惟明／訳　50

【国際慈善】
シエラレオネ共和国
生存をかけた孤児たちの挑戦　慈願／訳　60

【特別報道　モザンビークのサイクロン・イダイ被害】
絶望から希望に目を向ける　葉美娥／訳　74
私たちを育んでくれた大地を癒す　江愛寶／訳　80

【お板さんが法の香に浸る】
「辛」と「幸」の関係　済運／訳　86

【衲履足跡】
いつも通り奉仕する　済運／訳　88

【九二一を忘れるなかれ】
平穏に暮らしている人がすべき事　明湉／訳　92

【證厳法師のお論し】
回顧を冊子にして、人間（じんかん）の経典にする　慈願／訳　101

慈済大事記【九月】　済運／訳　106

表紙

１０年前の８月、猛暑に見舞われた台湾では正に水不足が心配されていた。頃合いよく訪れた台風が焦眉の急を救うと喜ばれたのもつかの間、その「恵みの雨」は一変して「洪水の猛獣」となって襲ってきた。「モラコット」は台湾の気象観測史上被害の数字が最も大きかった台風としてその名を残した。
（撮影・蕭耀華）

社・論

危険な水の上の情け深い渡し船

◎訳・慈願

「人生の貴さは、人の恩人になることであり、それが生命の価値なのです」。七月初め、證厳法師が高雄に行脚した時、慈済人たちから十年前の台風モラコットの話を聞いて、法師はボランティアたちの見返りを求めない奉仕に感謝すると共に、広い心を持って引き続き衆生に寄り添うよう励まされた。

その年の台湾は夏がとても暑く、水不足に苦しんでいた。人々は台風が雨をもたらし、旱魃を解消してくれるよう願っていたが、思いがけず豪雨となって台湾南部に襲いかかり重大な被害をもたらした。防災観念が乏しかった地域は土石流によって壊滅の危機に瀕したが、世界各国から支援の手が差し伸べられた。時を同じくして国内の慈善団体も各方面から緊急支援を行った。

風災が過ぎて年月が経つと、当時の被災者はもはやメディアの焦点でなくなり、今まで農務に携わっていた先住民や漢民族は、自分の両手によって新たな農耕開拓と生計を立てなければならなかった。中央研究院の被災後六年間の追跡調査によると、多くの人はもはや自分が「被災者」であるとは思っておらず、努力して生活を軌道に乗せることに取り組んでいた。

本期の主題報道に書かれているが、慈済の人文記録ボランティアは風災十周年を前にして現地を訪問し、当時悲しみに暮れて濁流の中を歩いていた住民の今の生活を報道している。現地には慈済ボランティアは多くなく、近隣地域のボランティアが手を携え交代で慈善訪問をしており、この十年間、途絶えたことはない。

大武壠平埔族の葉秀霞（イエシウシア）はモラコット風災の前の年に台風カルマーギ来襲の

際、慈済人と知り合っていたことから、風災支援の時には勇敢にボランティアを案内して小林村へ支援物資を届けたのだった。思いもよらず翌年の災害では再会したが、小林村は跡形もなく消えていた。

葉秀霞は元々公益を重んじ、被害に遭ってもその心は変わっていない。被災後、彼女は同族の人たちの気落ちを繊細に感じ取り、コミュニティーを立て直そうと、同族の女性たちと一緒に農産物の栽培から販売までを手がけ、アイデア溢れるお菓子類も開発した。それでも農耕している時に遠くで土砂崩れの轟音が聞こえると、やはり怯えを感じていたが、慈済人が訪れてくれると、悩みを話すことができ、それによって前に進む力が湧いてきたそうだ。

またこんな話もある。初めはアパレル業者が無償で設備と指導員を提供することにより高雄杉林大愛村で運営されていた裁縫組合は、専任管理者として谷瑞婷（グールイティン）が加わってから地域のママたちに呼びかけて「杉林バッグ」というブランドを立ち上げ運営した。知名度が上がるにつれ彼女らは一歩踏み込んで社会的責任を担った。杉林小学校に行って子供達に裁縫を教え、プレゼント用のラッピングをデザインし、販売してその売り上げを卒業旅行の費用にあてた。さらに今年は民間企業と協力して、他の山奥の町や村で裁縫職業訓練を行っている。

濁流は無情だが、そこには情のある渡し船がある。被災後の「復興」は「過去の再建」ではなく、未来に向かって信心と勇気を取り戻すことである。受けた傷の痛みは忘れられないが、人々の支援と思いやりで新たに人生を出発することができ、そこには人心を励ます無上の力が宿っている。

（慈済月刊六三三期より）

悪夢の洪水から再建

主題報道 十年の被災地支援を振返る

攝影・蕭耀華　訳・慈愈
企畫・張晶玫、胡青青

十年前の八月、猛暑に見舞われた台湾では正に水不足が心配されていた。頃合いよく訪れた台風が焦眉の急を救うと喜ばれたのもつかの間、その「恵みの雨」は一変して「洪水の猛獣」となって襲ってきた。「モラコット」は台湾の気象観測史上被害の数字が最も大きかった台風としてその名を残した。

災害は人命や家屋に深刻な被害をもたらし、再建の道のりは十年以上の歳月を経たが、過去に戻ることはできず、悲しみを抱いたまま前進し、少しずつ新しい人生を切り開いて来た。

救助に専念

高雄の山間部では洪水と土石流により他の地域と結ぶ多くの道路が破壊され、民家が埋もれてしまった。軍隊はその中の新開部落で行方不明者の捜索を行った。

台風モラコット被害十周年

愛を届ける

被害が深刻な地域の一つである屏東県林辺郷では、慈済ボランティアが軍用装甲車による支援の下、孤立した世帯に温かい弁当と救援物資を届けた（写真右）。水かさは腰の高さに達し、一人の住民が物資を頭の上に乗せて水の中を渡って家路に着いていた（写真左）。

泥水の中を突き進む

屏東県林邊郷は水が引いた後も汚泥が堆積し、伝染病予防と衛生面の対策を行うため、泥が固くなって清掃が困難になる前に、台湾各地からの慈済ボランティアを動員して、住民の清掃に協力した（写真左　撮影・呉萬智）。慈済ボランティアが日用品と見舞金を携えて、南投県信義郷の集落を訪れた（写真右　撮影・王国村）。

皆で力を合わせて

被災後、慈善訪問ケアが始動し、医療奉仕が行われた。慈済人医会メンバーは視察団に同行して屏東県萬丹郷に入り、住民の治療を行った（写真左）。住民はまだ止まないショックを話し、慈済ボランティアは話を聞きながら涙を拭ってあげた（写真右上）。ボランティアは台南市大内郷の被災地で視察を行ったが、泥の堆積が深刻で、少し歩くことさえ困難だった（写真右下）。

台風モラコット被害十周年

再建復興

2009年11月15日、高雄杉林大愛村の建設が始まり、復旧作業に被災者を雇用する支援プログラム（CFW）への参加を呼びかけた。翌年の1月、恒久住宅ができあがり、いち早く住民に入居してもらった（写真下）。2010年2月20日、村に新しく教会が建てられ、信者たちが初めて礼拝を行った（写真右）。

（慈済月刊六三三期より）

高雄市・甲仙区

残された人は、精一杯生きるべき

文・傅玉女（高雄人文記録ボランティア）　訳・葉美娥

当年、村人達が一緒に避難した時の龍眼の木は、今でも聳え立っているが、小林村は十数メートルも下に埋もれてしまった。故郷の土地に立っていても、葉秀霞はもう泣かないが、思い出は数え切れないほど多い。「私たちは世界中の人から支援してもらいましたが、恩返しができません。勇気を出して生きて行くしかありません」と彼女は自分に言い聞かせた。

あれから既に十年、獻肚山の麓の川底には山からの落石が溜まったままで、人の背丈よりも高い雑草と共に荒れた野原になっている。目の前の山肌は今も削ぎ取られたまま、土砂がむき出しになっている。記憶の中の小林村はもう見つからない。大声で叫んでも、虚しいこだまが返ってくるだけだった。

葉秀霞と私は川辺にいた。一人は小林村の村民で、一人は慈濟ボランティアだ。二人は肩を寄せ合って獻肚山を見ながら、心の中であの日のことを思い出していた。

二〇〇八年七月十八日、台風七号が台湾に上陸し、豪雨によって台湾南部各地に山崩れや土砂災害などの被害をもたらし、高雄県甲仙郷小林村から外に通じる道路が全て寸断された。慈濟ボランティアは徒歩で救援物資を担いで、九号橋から小林村に入った。葉さんと村民たちは何日も水も電気も食糧もない日々を過ごした後、突然紺のシャツに白いパンツ姿の見知らぬ人たちが村に来て、生活用品や飲用水などを届けてくれたため、皆感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

葉さんは自主的にボランティアに「被害が大きかった世帯に案内しましょう。早く元の生活に戻れるよう、清掃に協力してくれませんか」と言った。小林村の団結力は元々強かったが、外からの支援もあって短期間で復旧することが出来た。私は彼女の勇気と温かい思いやりが今でも深く印象に残っている。

その一年後、小林村がかつてない巨大な変化に遭遇するとは予想もしていなかった。二〇〇九年八月八日、中型台風

モラコットが台湾に豪雨を降らせ、八月九日深夜三時ごろ、洪水は高台の太子宮にまで達した。そして早朝六時十分、小林村の後方の標高一六〇〇メートルの獻肚山が崩れ始め、土石流が驚異的なスピードで急降下し、轟音とともに砂塵を巻き上げながら小林村の九隣から十八隣を完全に埋め尽くし、四百名余りの貴い命をも奪ったのである。村に入ってすぐの所に住んでいた僅か四、五十人が難を逃れた。

土石流後に形成された大規模な堰き止め湖が間もなく決潰する恐れがあったため、葉さんは子供をつれて村人と共に必死に避難した。大きな石が何度も彼女たちの後ろに落ちたが、やっと太子宮の裏山に登ることができた。四十数人は全身びしょ濡れになり、殆ど靴も履いてない状態で、山小屋の横にある大きな龍眼の木の下に避難した。飢えと寒さによって子供たちは低体温と脱水症状で唇が黒ずみ、大人は子供たちを抱きしめて互いに暖を取った。

二日続けてヘリコプターが上空を旋回しているのを見かけたので、彼らは希望を捨てず、さらに山頂まで登って火を燃やし、狼煙を上げた。ようやく発見され、子供や老人、女性を先にヘリコプターに乗せて脱出させた。八月十日夕方五時にやっと全員が当時の高雄県内門郷の順賢宮避難所に到着した。

私は小林村の村人の安否を気遣って、順賢宮の隅から隅まで探していた時、二階で葉さんとすれ違ったような気がしたので引き返しながら大声で呼びかけた、「小林村の葉秀霞さんでしょう?」私達は抱き合って泣いた。

順賢宮ロビーの掲示板には避難者リストが貼られてあった。葉さん一家五人は無事だったが、おばあちゃん、舅、姑、義理の弟一家三人が亡くなった。私は自分が嵌めていた数珠を外して彼女に渡し

●高雄の甲仙区小林里平埔文化団地の小林公廨（祖霊社）で行われた大武壠族夜祭（祖霊祭り）で、小林村の人々は踊りながら古謡を歌い、新たに勇気を奮い立たせた。（撮影・呂秀芳）

た。すこしでも勇気を与えたいと思ったのである。

その数珠は私が慈濟委員を受証した時に證嚴法師自らに嵌めてもらった大切なもので手放したくなかったが、それでも割愛することにした。彼女は掌に数珠を載せられた時、私の温もりを感じ、涙で前がにじんだのだそうだ。

日常生活を取り戻す

九死に一生を得た小林村の人々は仮住まいを転々としたが、やがて杉林慈済大愛園区、杉林区の日光小林、甲仙区の五里埔に完成した恒久住宅にそれぞれ落ち着いた。彼らはそれぞれ自分に合った団地に入居し、葉さん夫婦も小林村にもっとも近い甲仙区の五里埔に入った。

台風モラコットの土石流により大武壠族が行っていた祭りの場所「公廨」は埋没した。被災して二ヶ月後、村人は臨時の「公廨」を建てた。伝統ある一年一度の夜祭に、出稼ぎに出ていた村人も次々に故郷に帰って来た。

この数年間、夜祭はいつも通りに続けられている。二〇一八年は十月二十三日に開催され、甲仙区の平埔文化園区小林「公廨」では、昼間から太鼓の音が響きわたって賑わい、夜になると年配の人々が頭に花冠をつけ、村人が手をつないで伝統な古謡を歌いながら一緒に踊って「公廨」に入り、集落の守り神「太祖」に供え物を捧げた。高音と低音が入り混じった和やかで静かな雰囲気が漂った。年に一度の「夜祭」は悲痛な体験をした村人の団結力を高め、新たな勇気を結集させている。

だが、「小林村埋没」はあまりにも辛い出来事である。六十七歳の王輝煌（ワンホイホワン）は災害が起きた時、丁度仕事で外出していたが、人生の半分を連れ添った妻は亡くなった。数年前に娘が故郷に帰ってきて一緒に暮らしている。ウチワサボテンを栽培することが彼の暮らしの唯一の支えだが、心中の寂しさと妻への思いは埋め合わせることができず、涙にくれる日々を送っている。「夜祭」当日の朝、王さんは若い人を連れて、「公廨」の茅葺きの修復をした後、自分のウチワサボテン農園に閉じこもり、人に会おうとしなかった。

葉さんは王さんの寂しく立ち去る後ろ姿を目にした。表向きは皆、普通の生活に戻っているように見えるが、心中の喪失感は依然として埋められていないのだということを彼女はよく知っていた。

●祭りで葉秀霞（中）は大旗を振っていた。復興生活の道程は長いが、互いに励まし合って精一杯生きようとしている。（撮影・張清文）

共に困難を乗り越え 互いを大切にする

普段困り果てて気分のすぐれない時、葉さんはいつも私を待っていてくれる。私は彼女に寄り添って一緒に話しながら食事をする。被災後、最も難しいのは「気分が落ち込む」のを乗り越えることだった。特に台風が来ると彼女はいつもひどく怯えてしまうので、私はすぐに電話をかけて様子を聞いている。

私の住んでいる団地は、五里埔までは遠いが、毎月必ず慈濟の浄財を集めに出かける。彼女は村人たちと被災を機に知

●甲仙区五里埔にある小林一村は赤十字社によって建てられた。葉秀霞はここで生活を再建し、一家は温もりのある暮らしをしている。（撮影・張清文）

り合い、互いに最良の形で善の心を分かち合っている。

葉さんと夫は観光案内をしながら六分（約千七百六十坪）の農地を借りてバナナを植えていた。二〇一六年のある台風で、努力して植えたバナナの木は一本残らず倒れてしまった。生きて行くために村人と互いに励まし合って生計を立てることを考えた。彼女は「夜祭」で使う竹のコップからアイデアを得て、オリジナル商品を作った。また七、八月には野生の筍を乾燥させたものを販売したり、当時一緒に避難した村人と一緒に旧正月の前にお餅を作ってネットで販売した。中

秋節には現地産のパッションフルーツに緑豆餡を加えた「百福餅」を作り、今では小林村特産の手土産となっている。

彼女のバナナ畑は今はグアバ畑に変わった。グアバは年に数回収穫できるが、農業は天候に左右され易く、値段がよくなかったり、収穫量が少なかったりするため、自分でできることは何でもやるしかない。昼近くになってもグアバの袋付けをしていた時、遠くから大きな音がした。驚いて顔を上げると向いの山から大きな石が転がり落ち、砂塵が立っているのが見えた。風災から十年経つが、未だに山の落石はよく見られ、その度に彼女は恐怖におびえる。

当年、村人達と一緒に避難していた龍眼の木は、今でも聳え立ち、風雨よけに使った布は木の根元に埋まっている。以前、山の中腹にあった太子宮も平地になり、小林村は十数メートルの地下に埋まってしまった。故郷の土地でこの山林を見ても、葉さんはもう泣かないが、思い出は数え切れないほどある。「生き残った人は精一杯生きなければいけない。私たちは世界各地の人に支援してもらったが、恩返しができない。その代わり、勇気を出して、精一杯生きていくしかないのだ」と彼女は自分に言い聞かせた。

（慈済月刊六三三期より）

台風8号（モラコット台風）の被害

慈済の動員

◎訳・善耕

被害状況

◎2009年8月台湾は干ばつで、ダムの水位が低くなったため、一部の地域で給水制限が實施された。
◎8月6日8時30分、中央気象局は、中型台風モラコットの暴風警報と共に、初めて特大豪雨警報を発令した。8月10日に台風警報が解除された後も、豪雨警報は発令され続けた。
◎中央防災センターの統計によると、台風モラコットによって死者681人、行方不明者18人の被害が出た。そのうち高雄県（2010年に高雄市と合併して直轄市に昇格）甲仙郷小林村小林部落および六龜郡新開部落はほぼ壊滅的な被害を受けた。台湾の氣象史上最も被害が大きい台風となった。その規模は1959年に起きた八七水害を上回った。
◎世界各国が支援を申し出ると共に義援金を提供した。

援助

◎台湾全土のボランティアが被災地の隅々まで慰問、被害調査、配付、清掃、施療など全てを行った。
◎短期、中期、長期ケアは2010年7月まで続けられた後、一段落した。
◎52の国と地域で台風モラコット被害のための募金活動が行なわれた。

緊急援助段階

◎物資の配付：炊き出し70万食、即席麺4万箱、エコ毛布4万枚、エコ食器21万セット、日用品パック6万個（歯磨き粉、歯ブラシ、タオルなど基本的な日用品）
◎義援金の配付：緊急見舞金（慰問金）を28471世帯に配付。
◎医療サービス：1374人余りの常駐医療人員が延べ9443人を診察。9000個の家庭用医薬品パックを提供。
◎被災地の清掃：

・8月11日から9月6日まで台湾全土からのボランティアが被災地の清掃活動に協力。
・清掃を支援した重機（抽水ポンプ、小型ブルドーザー、ショベルカー、リサイクルトラックなど）：延べ433台
・動員したボランティア数：延べ15万人、
・出動した車輌数：延べ3000台

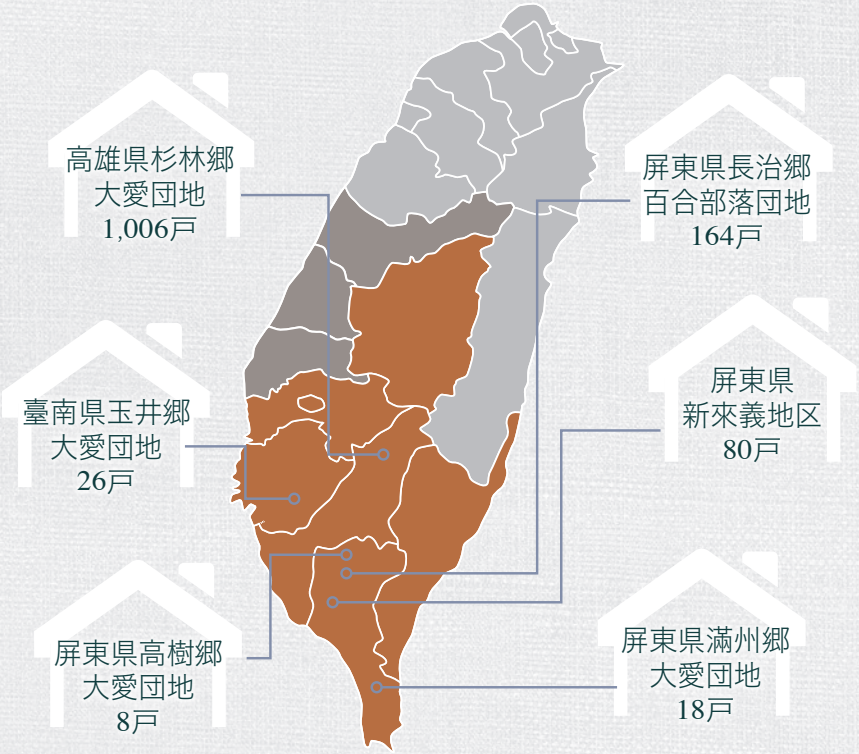
復興段階

◎安身：（落ち着ける生活）
1302棟の恒久住宅、学校1校、教会及び集会所などの施設を建設。CFW参加者数：延べ36703人。

◎安學：（安心して学ぶ）
33674人の生徒に助学金を提供し、41校の小中学校で給食支援。

◎安心：（心の安らぎ）
避難所で心理指導：避難所と被災地児童の勉強指導。

◎安生：（安定した生活）
恒久住宅団地内に先住民の伝統文化芸術クラスと裁縫クラスの開設による職業訓練サービスと経済的自立の指導。



慈済が建設した恒久住宅の地点

■ 重大被災地域：南投県、嘉義県市、台南県市、高雄県、屏東県、台東県

■ その他被災地域：台中県、彰化県、雲林県

高雄市・杉林区

生まれて初めての水

◎撮影・陳裕炎（高雄人文記録ボランティア）
文・張晶玫（高雄人文記録ボランティア）
訳・有田夏子

「私が生まれて初めて飲んだのは、山の上の水だった」。李昊（リーハオ）は那瑪夏（ナマーシア）郡に戻り、再び土地に親しみ、また自分自身とも仲直りをはたした。だが次の世代はどうなのか、彼には良くわかっていた――

「南沙魯（シャールー）村の第二世代が生まれて初めて飲むのは、杉林慈済大愛団地の水である」。

「自分は本当に、こんな生活をずっと続ける気なのか？」李昊は薄暗くなっていく夕焼けを見ながら、静かに自分に問いかけた。山の中腹にある茶畑は青緑から深緑に変わっていった。山から一陣の風が吹くと、指に挟んだタバコの火が明るく光り、彼は物思いから引き戻された。タバコの火が気づかぬうちにフィルターまで来ていたことに驚いた。思いっきり吸いこむと、激しく咳き込んでしまった。

彼は製茶場の寮へ戻る道をゆっくりと歩いた。故郷を離れ、茶園で働き始めて二十日近くが経った。いつものとおりタバコを二十箱買い、目の前に並んだ十九箱のタバコを眺めながら、彼はポケットにあった喫いかけの一箱に手を伸ばした。暗闇の中、彼はひとり、自分に向かってつぶやいた。「ビンロウもやめたことだし、今日からタバコもやめようか…」その日から、喉がなんとなく不快な日が続くと共に、タバコを吸いたい気持ちはだんだん薄れていった。

断腸の思いで転居を決める

李昊がタバコをやめたのは、彼が高雄の杉林慈済大愛団地に入居して三年目のことであった。避難のため那瑪夏郡を慌ただしく離れて以来数年間、彼は茶園での製茶、道路傍の草刈り、建築現場の板張りなど、いろいろな仕事をした。団地には風雨をしのげる家があるにもかかわらず、彼はまるで平地に連れてこられた獣のように進んではぶつかり、自分の生き方が見つからないままだった。

被災する前にも家を数か月空けることはよくあったが、いつもある種の安心感

があった。どんなに状況が悪くても、山の上に戻れば生活できるし、飢え死にすることはないと思っていた。だが山を下りて団地に移り住んでからは、まるで大自然との臍の緒を断たれたかのように、不安がどんどん強まり、耐えがたくなった。毎日家が恋しくなり、出稼ぎに行っても、状況が許す限りは家から通った。

家族のため、李昊はあちこちを漂流した。だが彼は家族に認められているとは感じられなかった。彼は生まれつき情熱的で、正義感が強く、ブヌン族の部落のあらゆることに手を貸そうとしたが、しばしば不愉快な結果に終わった。酒だけが彼の慰めで、仲間と酒を飲むことが好きだったが、酔い潰れると騒ぎを起こした。台風モラコットが豪雨をもたらしたあの日も、彼は酒を飲んでいた。

二〇〇九年八月七日、夕暮れとともに、濃厚な黒雲が那瑪夏の空を包み込み、台風モラコットによる風雨が次第に強まってきた。すでに酒の匂いを帯びていた李昊は、飲み友達とよろめきながら山道や渓流の様子を確認し、南沙魯村の家々の門を強く叩いては、ろれつが回らない口調で、台風への備えをするよう知らせて回った。

八月八日早朝、一睡もせず、全身泥まみれの彼は、暴風雨のなか自宅に帰った。一族への貢献を自慢しようとしたその時、妻は怒り心頭で彼を非難した。「一晩中どこを飲み歩いていたの！？みんなが探していたのよ。水に流されたのかと思ったわ…」彼は腹にたまった怒りを抑え、椅子を蹴飛ばした。突然、屋外でドドドと巨大な音がして、山の斜面から洪水が隣家へなだれ込んだ。酒の酔いもさめた彼は、老いた母、身重の妻と幼子二人を連れて、慌ただしく高台に向かって逃げ出した。

●かつて破壊をもたらした楠梓仙渓の源流で、李昊は子供たちの水遊びを眺めていた。この10年来に起こった目まぐるしい変化を思いだしながら。

山を逃げ下りた李昊一家は、失意のうちに被災者となり、高雄県燕巣郡の工兵学校の避難所に配置された。妻の林雅雲は三人目の子を身ごもっており、心理的な負担は身体的な疲れや負担をもはるかに上回っていた。臨時避難所でも寂しさや苦しさで憂鬱になり、妻は子供が生まれても落ち着いて暮らせる家がないことを心配した。居場所を失った日々で妻に寄り添ってくれたのは慈済人で、ほかの誰も彼女に確かな約束や慰めを与えることはできなかった。

その後、各種の慈善団体が被災者のために住居を立てるという話が次々と持ち上がったが、李昊は那瑪夏の一族とともに杉林慈済大愛団地に入居することを決めた。しかし、彼のこの決定を理解しない人々もいた。「大愛への引っ越しに登録する?平地で飢え死ぬに決まっているよ」「山の上の家はまだあるだろう。慈済の家を欲しがるなんて欲張りだ…」「あなた達が山を下りたら、政府はもう山の上の道路を修復してはくれないよ…」。

押し寄せる疑いの声に、彼は傷つき、怒りを覚えていた。安心して暮らせる家が欲しいという気持ちを必死で説明したが、広がってしまった互いの心の溝を埋めることはできなかった。

プロフィール

高雄杉林慈済大愛団地

高雄杉林慈済大愛団地の第1期工事は2009年11月15日に始まり、88日をかけて完成した。第1グループ被災者が2010年の旧正月前に入居した。第2期は2011年3月に団地内の小学校と共に工事を開始し、同年10月に完成した。両期工事の建物には、約千世帯に及ぶ那瑪夏、甲仙、桃源、茂林、六亀等の地区の被災者が入居している。団地内には教会、シルバーセンター、住民センターなどの施設がある。

安定したが心が晴れない

杉林地区に予定された恒久住宅建設計画は矢継ぎ早に進んだ。調査と申請関連資料の作成から捺印、そして高雄県政府の審査を経て二〇〇九年十一月中旬より工事が始まった。八十八日間にわたって、各建設チームが協力して工事を進め「CFW」(復旧に関わる仕事の機会を与えて賃金を支払う被災者雇用の支援プログラム)に参加する住民や、多数のボランティアの貢献も加わり、二〇一〇年二月十一日、杉林慈済大愛団地は第一期入居式を迎えた。当日、慈済基金会は全世界

の祝福を受けて入居者のために感謝だんらんパーティを催し、三百テーブルを設けて食事をふるまった。

李昊一家も第一期の入居者だった。林雅雲は満九カ月のお腹を抱え、真新しい家具が揃った恒久住宅を見ると、眉間に堅く寄っていた皺もほぐれた。彼女は慰問に訪れた慈済ボランティアに対し、「気持ちが落ち着きました。家があるというだけで気持ちが全く違います」と伝えた。二人の幼い息子たちは彼女にぴったりと寄り添っていた。故郷はまだ懐かしかったが、ようやく心の重荷を下ろすことができた。

感謝だんらんパーティから五日後、李昊の三人目の息子、李呈耀が無事に誕生し、杉林慈済大愛団地は初めて新生児を迎えた。子供が生まれて間もなく、慈済ボランティアはお祝いのため病院を訪ね、プレゼントと祝い金を贈り、子供の無事な成長を祝った。喜びに溢れるボランティアとは対照的に、病院で妻に付き添っていた李昊はひときわ静かだった。

小さな命が満一カ月を迎えると、慈済ボランティアから連絡が入り、菜食おこわと赤い卵（註）を持って、李昊とともに団地の一軒一軒に届けてまわった。みんなが団地でいちばん小さな住民を祝福し、その子が団地で幸せに成長することを願った。

註釈：台湾では生まれて一カ月を迎えると満月または彌月と呼んで祝う習慣があり、おこわと赤く色づけしたゆで卵を祖先にお供えし、客をもてなす。

慈済人は喜びの気持ちを分かち合っていたので、李昊がずっと気まずい表情を隠していたことには誰も気がつかなかった。その時、李昊には子供の満一カ月を祝う余裕はなかった。それは、それまでずっと自由奔放を通してきた彼にとって、人には言えない苦しみだった。

天が与えた第二の家

李昊は山を下りて以来、酔いとしらふの間を行き交う苦しい日々を過ごしていた。全身に酒の匂いをまとった彼が居間のテーブルに足をかけると、厨房の椅子が倒れた。妻はかっとなって「酒を飲みたいのは自分だけだと思うの？私だって飲んでやるわ」と叫んだ。彼が振り向いて怒鳴ろうとすると、三人の子供たちが壁の隅で驚いて彼を見ているのが見えた。彼が一歩踏み出すと、長男と次男は

身を返して逃げた。二歳過ぎの呈耀だけが、首をすくめ、びっくりして彼を見ていた。子供の表情が彼を動かした。彼はうなだれで床に座ると、また自分に問いかけた。「おれは、本当にこんな生活を続けるのか？」

二〇一三年、杉林慈済大愛団地に入居して四年目、李昊は酒をやめる決心をし、ひとり山に戻って農業を始めた。彼の故郷、那瑪夏区南沙魯集落に戻ったのは、そこが彼の生命の原点だったからだ。落ちぶれて破滅のふちにあった彼は、もう一度自分を取り戻す必要があったのだ。

台風モラコットの災害の年、氾濫した楠梓仙渓により、李昊一家の農地は真っ二つに分けられ、広くて急な河川に隔てられてしまった。李昊は山の傾斜の近くに、面積は小さいが比較的安全な土地を選んで種をまくしかなかった。政府は安全と林地を休ませるため、橋を架けることには同意しなかった。彼はほとんど文句を言わなかった。山の上に戻り、想い続けた緑の大きな山を見られるだけで、慰められた。これまでの苦しみと不安は、一筋、また一筋と吹き付ける山の風のなかで、解き放たれていった。

彼は小さな土地にショウガやナスを植えた。石ころや粘土が混ざった土の盛り上がりがいくつかあったが、特に整地することもなく、石の傍らに里芋を植えた。里芋の収穫量は少なかったが、香りと弾力は十分だった。

李昊は農業に関して、何も知らなかった。ショウガの栽培には特に多くの技術と知識が必要だった。彼は頭を低くして、もともと彼を認めようとしなかった年長者たちに教えを乞うた。「山の下から戻って、別人になったのか？」と笑うものもいた。彼はいつもニコニコして答えた。「酒をやめたら、かえって頭を下げて人に尋ねることができるようになりま

●李昊はもともと農業について何も知らなかった。被災後に人一倍努力して、ついに豊かな農作物を実らせることができるようになった。

した」。年長者のテーブルの上に並べた米酒の淡い香りが漂い、遠くから一族の人たちが酒を飲んで談笑する声が聞こえてきたが、李昊はただ集中してメモを取った。一心に、緑豊かに生い茂り始めたショウガ畑のことだけを考えていた。

農作物の収穫量は多くはなく、毎月二十日以降は金が足りなくなったが、彼はかつて傷つき捨てられたこの土地に、辛抱強く向き合った。杉林慈済大愛団地の近くにある永齢農場で働く妻も、農場における有機農法の知識を教えた。彼は一歩一歩、ゆっくりと手探りで進んだ。

山へ戻った李昊は口数が少なくなり、一日中何も話さないこともあったが、彼はこんな自分が好きだった。空が薄暗くなってくると、彼は掘ったばかりの里芋を持って杉林慈済大愛団地に帰ることもあった。薪を燃やして鍋で里芋を煮て、みんなで一緒に分け合った。

台風モラコットの水害後も、異常気象により、毎年不意を突くような激しい豪雨に見舞われた。杉林慈済大愛団地に大雨が降ると、李昊は農地を守るために危険を冒して山に戻ることはせず、山の下の永久の家の中で待つしかなかった。雨粒が滑り落ちる窓のガラス越しに外を見やり、苦労して育てた農作物が天に回収されてしまうことを心配した。彼は自分の選択を後悔はしなかった。彼はわかっていた。杉林慈済大愛団地もまた、彼の家なのだと。この第二の家は、天が彼に与えた不思議な運命によるものだからだ。

台風モラコットの前、山の上の農地は、李昊とその兄弟たちを養うことはできなかった。既にそれぞれ家庭を持っていた彼らは、東へ西へと出稼ぎをするほかはなかった。何とか生活はできたが、安定しているとは言えなかった。彼らの次の世代も、このような生活を続ける運命だった。

災害後、家族は杉林慈済大愛団地に引越し、平地の生活に適応することを学ばなければならなかった。「山の下では、毎朝目を開けた瞬間から、お金がかかる」というのが、団地の住民たちの本音だ。だが、いつ来るとも分からない天変地異を恐れる必要はなくなった。また平地では仕事も探しやすく、交通も便利だ。李昊の兄たちは安定した仕事を見つけ、杉林慈済大愛団地に定住した。過行く日々のなかで、心も次第に落ち着き、山の上のことはすべて李昊にまかせ、農作が忙しい時は一家が和気あいあいと手伝った。

山頂を流れる白い雲を眺めながら、李昊はしばしばぼんやり思った、「もし台風モラコットがなかったら、もし杉林慈済大愛団地に入居しなかったら、この祖先が残した土地は、兄弟げんかの原因になっていただろう」と。

●李昊の末の息子、李呈耀は杉林慈済大愛団地で生まれた初めての新生児だった。10歳になった彼は、ナス畑で父親の仕事を手伝っている。芸術の才能がある彼はよく、絵画作品で入賞する。

生命の水は、自然に流れ出る

二〇一九年二月十六日、李昊の末の息子、李呈耀は十歳になった。彼が通う巴楠花（パナンホワ）部落小学校は、同年九月に中学部の第一期生を迎えるが、元々は那瑪夏民族小学校という名前だった。台風モラコットの災害後、那瑪夏民族小学校の教師と生徒は全壊した校舎を目にして、他の学校へ移らざるをえなかった。多くの人の助けを得て、二〇一二年一月十六日、慈済が杉林慈済大愛団地に建設した民族大愛小学校が開校した。二〇一七年八月一日に先住民実験小学校に改定され、教師と生徒の投票で、校名は巴楠花部落小学校に決まった。学生の七割は先住民で、三割が関南、客家及び新住民に属する。ブヌン族は自分たちのことを巴楠（パナン）とよぶ。その植物はブヌン族と土地とのつながりを象徴している。またブヌン族にとって、巴楠は家の意味でもある。

李昊は毎日山へ行き、そして毎日杉林慈済大愛団地に戻るので、まるで通勤しているかのようだ。彼は第二の家に対する気持ちを自分から打ち明けることは少ないが、内装を新しくし、また家具もいくつか買い足した。彼と同様に、団地の多くの住民たちはもはや風雨や災害で家に帰れなくなることを心配する必要はない。交通が不便だからと故郷を去る必要

もない。故郷の若者たちが次第に外地から杉林慈済大愛団地に移り住むようになり、団地内の愛農教会の青年団が若さと活気をもたらした。李昊と若者が後輩らと一緒にバレーボールやバスケットボールをし、一回一回の試合の中で、ブヌン族の誇りを取り戻していった。汗の一滴、一滴に、ブヌン族に代々伝わる勇気がよみがえった。

夏の照り付ける日差しで、土から熱気が上がり、李昊は顔に伝わる汗をぬぐった。顔を上げて目を細め、三人の息子の姿を探した。彼らはちょうど学校の休みに、父親と山の上に来てナス畑の手伝いをしていたのだが、子供たちは炎天下ですぐに疲れてしまった。長男と次男は元気をなくして、大きな芋の葉で遊んでいた。三男の呈耀だけが、下を向いてナスの余分な葉を切り分けていた。葉の下から現れたナスは、陽光の下で紫色に光っていた。李昊は三男を見つめ、「この子は、生まれた時から特別だった」と思った。

李呈耀は、ほかの子たちとは確かに違っていた。物静かだが、内向的ではなく、芸術の才能に溢れていた。彼の筆による色彩豊かな絵は、多くの賞を獲得した。僅か十歳ながら、父親の葉むしりや草取りを手伝う時、大人も驚くほどの集中力とこだわりを見せた。

「行くぞ！泳ぎに連れていってやろう」

と父親が言うと、三人の子供ははしゃぎながら父親のほうに走ってきた。小型トラックでガタガタと山のさらに奥まで進むと、周囲は緑色がしだいに深くなり、セミの声も大きく響き渡った。楠梓仙渓の源流のサラサラという水の音が聞こえてきた。

川べりに着くと、三人の子供たちは待ちきれずにシャツを脱ぎ、渓流の冷たい水に飛び込んだ。潜っては顔を出す子供たち。水しぶきが飛んで、笑い声が響いた。李昊は川の端の大きな石に腰を下ろし、子供達には教えたくないと思った。「十年前、まさにこの川が南沙魯村を破壊したんだ。渓流のそばにある雑草に覆われた山壁の小道が、台風モラコットの災害のあの日、避難した道だった」。

李昊は心の中ではわかっていた。「私が生まれて初めて飲んだのは、山の上の水だった」。彼は山に戻り、一切の武装を解き、あらためてこの土地に親しみ、自分との仲直りも果たした。だが次の世代は違う。「南沙魯村の第二世代が初めて飲むのは、杉林慈済大愛団地の水だ」。

第二世代は大愛団地の中で、人生やブヌン族の文化の可能性と発展の多くを見出していくことになるだろう。李昊はあの時のことを振り返り、彼らを助けてくれた多くの人々のことを永遠に忘れることはない。（慈済月刊六三三期より）

高雄市・杉林区

手提げバッグを縫うことは願を掛けること

撮影・莊慧貞（高雄人文記録ボランティア）訳・惟明
文・胡青青（高雄人文記録ボランティア）

被災した女性の生計の為に立ち上げた「杉林布（サンリン）バッグ工房」は、いつ経営が傾いてもおかしくない状況から今では独自のブランドを確立しただけでなく、社会的責任も担っている。

明るい朝の日差しが窓から入り、布製品が一面に並べられた作業台の上を照らしていた。ラジオ放送の音に紛れてカバーステッチミシンなどの機械音が断続的に聞こえる。杉林大愛村にある広さ約五十坪の「杉林布バッグ工房」には十数名の中年女性が生地を裁断しミシンを使って忙しく働いていた。そして、お喋りをして大声で笑うことも、時には話し合いに熱くなることもあった。

被災した杉林村の住民の生計のためにビーズや瓢箪の彫刻、木彫などの伝統工芸のクラスを設立し、各方面から資源の提供を受けたが、初期の裁縫クラスは注文や人員が不安定で、運営は大変だった。当時から支えて来た責任者の谷瑞婷（グールイティン）は今、工房の片隅に腰を下ろし、目の前の楽しげな光景を笑顔で見ているうちに様々な思いが胸に溢れてきた。

ママチームの誕生

朝露で濡れた芝生から清々しい香りが漂う中、谷瑞婷はのんびりした田園生活を楽しむ暇もない。休日にも関わらず、谷瑞婷は休む余裕がなく、裁縫クラスの仕事を広める為、急いで杉林慈済大愛村に行き、裁縫クラスのお母さん達と合流して車でバザール会場に向かった。

車の中で「私たちは裁縫ができるだけではなく、自分達が作ったものを紹介できるようにならないといけません」と再三言い聞かせた。彼女は皆が自分達の工房で作った商品の独創性を理解して、積極的に販売の基礎知識を学び市場のトレンドや流行を取り入れるよう望んでいる。彼女が工房の専任管理者になって二年、杉林裁縫クラスは変貌を遂げた。

夫と同様、職業軍人である谷瑞婷は、まだ海軍の左營駐屯地に服役していた時

に杉林区の丘陵における傾斜地を購入した。二〇一二年に退役した後、在学中の娘二人を連れて杉林区に移り住み、優雅な田園生活を楽しむようになった。

二〇一七年、谷瑞婷は杉林布バッグ工房で働き始めると軍隊で培った人事管理の経験を生かして組織運営の透明化を図り、メンバー同士を信頼し合える仕事仲間に変えた。工房の運営が少しずつ良くなると事務や営業の仕事も増え、彼女は毎日、夜の九時、十時まで働いた。

二〇一八年初め、二十八歳で帰郷した青年の呉峰智（ウーフォンジー）を工房に招聘し、ネットでの販売を立ち上げると共に営業の第一線を任せたので、バザール会場では布バッグの販売だけでなく、多くのデザイナーとも知り合いになることができた。僅か数ヶ月で何人ものデザイナーから受けた委託製造のオーダーは、工房の二十数人全員が残業しても消化しきれない程だった。

「オーダーの一部を外注にしましょう」と谷瑞婷が会議で提案した。メンバーからは心配する声も聞かれたが、話し合いの末、全員が納得した。「杉林区に小さな加工工場があります。訊いてみたらどうでしょうか」と誰かが提案した。谷瑞婷と呉峰智は翌日、その八人しかいない加工工場を訪れたところ、注文がない為に稼働停止寸前であることを知った。工房からの注文で幸いにもその工場は起死回生し、その後、協力関係が築かれた。

「以前から私たちは多くの人に支援してもらってきました。今は自分たちの足で立っており、他の人に手を差し伸べるべき時です。互いに助け合ってこそ『皆が良くなる』のです」と、今回の経験から得た新たな展望を谷瑞婷は集会の時に

●谷瑞婷（左）は大愛村にある杉林布バッグ工房でお母さんたちを指導し、社会的責任を担うファッション・ブランドを立ち上げた。

話した。一緒に頑張ってきた仲間も彼女の意見に賛同した。

家庭のような工房

照明の明るい応接間で劉秀勉（リウシウミエン）は車椅子に座って作業をしていた。割り箸を使って少しずつ恐竜のぬいぐるみに綿を詰める作業である。彼女は被災後、杉林大愛村に入居したが、二年前に受けた膝関節の手術の回復が思わしくなく、行動が不自由になった。突如降って湧いた病の痛みで、本来楽天的な彼女も気分が塞ぎ込むようになった。

彼女と親しい谷瑞婷はよく見舞いに来ていた。彼女の家計状況を知り、「私たちの工房はとっても忙しいの。手伝ってくれない？」と聞いた。秀勉が自分の足を見て、「しかし、私は体が不自由で……」と呟くと、「大丈夫、不便だったら私たちが材料を送りますから。」と直ぐに答えた。次の日、谷瑞婷は材料を送った。数ヶ月が経ち、工房の仕事のおかげで体の不調も気にならなくなり、家計を助けることもできたので、彼女は自分が役立つ人だと思えてきて、少しずつ以前の自信を取り戻し始めた。

日曜日、工房のメンバーはメンバーの一人である賴許瓊珠（ライシュージオンジュ）の入居祝いの為に杉林から一時間車を走らせて、左營区のあるビルにやってきた。お母さん達は嬉

プロフィール

杉林布バッグ Sunny Bubao 大愛裁縫工房

2010年 5月10日、裁縫クラスが立ち上げられ、台南のアパレル製造会社である徳式馬企業（Texma International Co. Ltd.）が無償で機械設備と製造技術者を提供し、且つ公共機関からの注文を共有した。

2012年 労働庁は被災地を対象に職業養成計画を打ち出した。裁縫クラスは補助金を申請し、事業を転換し始めた。

2016年 裁縫クラスは職業養成計画に参加すると、下請から布バッグの製造へと主な事業を転換させ、名前も「杉林布バッグ工房」に変わった。

2018年 繊細で頑丈に創られた製品が評判になり、樹徳工科大学芸術管理学部と産学提携して「トレンディー杉林布バッグ」というブランドを立ち上げた。

2019年 多くの企業と提携し、山奥での裁縫職業訓練に協力している。

しそうに寝室、厨房、浴室、ベランダを覗き、何人かは八十五歳の瓊珠と応接間でお喋りをしていた。

谷瑞婷は瓊珠と厨房で団子スープを用意していた。「子供達は良い子に育って、貴女もやっと辛い日々が終わったわね」と彼女は感慨深げに瓊珠に言った。瓊珠の夫は被災後、家を失った喪失感から抜け出せず、終日酒をあおるようになった。彼女は家計を支える為に、懸命に働いた。数年前、彼女が仕事から帰ってきて玄関先で酔い潰れたご主人を見つけたが、既に息が絶えていた。子供達は家を離れて就学していたため、独りぼっちになった彼女は工房が家庭になり、仲間が家族となった。

「共に学び」「共によくなる」

下請けのみの工房にさせたくない思いから、谷瑞婷と呉峰智はママチームが型紙の開発から、試作、設計、配色まで新商品を開発し、オリジナル・ブランドを立ち上げることまで期待した。その為、彼らは休日を利用して様々な展示会を見学したり、生地屋に行って生地の知識や材質や柄の応用などを学ばせた。二〇一八年、杉林布バッグ工房のママチームは確かな裁縫技術で以て樹徳工科大学芸術管理学部と産学提携し、学生のアイデアをもとに回収古着から手作りの布バッグを作り、共同で「トレンディ杉林布バッグ」と名付けたブランドを立ち上げ、高雄市前鎮区のコンテナアートのある観光スポットに出展するようになった。

一九八九年生まれの呉峰智は、学業や仕事のために故郷を離れた若者にとって工房が職業訓練のためのプラットフォームとなることを期待している。地元で就職する機会を増やし、故郷に留まることができるようにしたいのだ。彼はいつも「工房をしっかり運営してこそ、若者に自分達の良き技術を伝授することができるのです」と工房のママチームに話し、二〇一七年からは夏・冬の休みに杉林区、旗山区の学生にアルバイトの機会を与えている。

二〇一八年、杉林小学校の生徒は修学旅行の費用が負担になっていた。学校側と工房はコラボして企画をたて、パイナップルの収穫期にパイナップル・ケーキをつくり、工房はそれを「勉強好きな杉林」という布バッグとセットにして販売した。そしてパイナップル・ケーキを完売させただけでなく、文化クリエイティブ・コンテストで賞までもらった。

今回の提携をきっかけに、陳淑惠（チェンシューフイ）校長は裁縫工房のママチームを学校に招き、生徒達に布バッグの作り方を教えるようになった。

山奥の子供達は祖父母の代が養育していることが多く、教育は地域と密着したものであるべきだと校長は感じている。彼女の「世代共学」という理想は谷瑞婷と呉峰智の考えと見事に一致したのである。

裁縫クラスは今年で十年目を迎える。いつ店仕舞いしてもおかしくない状況から着実に歩みを進め、今では「共に学び」、「共に良くなる」社会的責任を担えるまでになった。

（慈済月刊六三三期より）

●谷瑞婷（左）。「杉林布バッグ工房」のママチームは地元の学校の要請で生徒達に手作りの布バッグの作り方を教えた（写真左）。工房でも生徒達の修学旅行の費用集めに「勉強好きな杉林」と題した布バッグセットを売り出した（写真右）。

国際慈善・シエラレオネ共和国

生存をかけた孤児たちの挑戦

この五年間、エボラ出血熱の伝染から雨季の洪水と土石流被害に至るまで、西アフリカの貧しい国シエラレオネ共和国の国民は、生存の試練に立たされてきた。最も苦難に直面したのは災害で両親を亡くした孤児たちである。食糧と教育、医療が欠乏している中で無事に成長できるかどうか、いまだ未知数なのだ。

◎文・楊宇湘（慈済アメリカ総支部国連プロジェクトチーム）
写真の提供・慈済アメリカ本部　訳・慈願

慈済（ツーチー）とシエラレオネ共和国の縁は、二〇一五年エボラ出血熱が伝染する中で幸いにも生存した人たちを支援したのが始まりだ。今年で五年目を迎えるが、ケアは途絶えたことがない。エボラ出血熱の伝染が鎮まった後も、国民は更なる苦難と向き合わなければならなかった。二〇一七年、土石流と洪水で多くの人命が奪われ、多数の孤児が残された。

この五年来、慈済はシエラレオネ共和国内で、カリタス・フリータウン基金会とヒーリー国際救援基金会及びランイ基金会と非常に良好な協力関係を結んできた。そして「最前を行き、最後までやり通す」という共通理念の下に、苦労を厭わず住民のために奉仕し、慈済の愛の軌跡を持続させてきた。それは全国のエボラ出血熱生存者に手を差し伸べるだけでなく、

●4月16日，フリータウンにある総合児童センターに慈済と協力団体から贈られた五穀粉が届いた。センターには40人の子供がおり、大半が栄養不良に陥っていた。

多くの収容所や孤児院、診療所、社会福祉機構などでも人々に寄り添ってきた。

今年の四月十一日から十六日まで、私は慈済アメリカ支部ボランティアチームと一緒に世界各国から寄せられた愛の義捐金を携えて再度、ケアのためにシエラレオネ共和国の首都フリータウンを訪れ、貧困と苦難に喘ぐ人々に、「あなた達を忘れてはいない」ことを伝えた。

以前は台湾の白米やエコ毛布、携帯用食器を贈ったが、今回は四千五百二十缶の五穀粉（注）を西部地域にある診療所、病院、孤児院、収容所、学校などを含む十二カ所の施設に届け、千百二十三人の住民が恩恵を受けた。

注

五穀粉　大豆、ハトムギ、オーツ、蕎麦、もち米、玄米、紅小麦、トウモロコシ、粟、紅豆、緑豆、ブラック・アイド・ピーズ、グリーンピース、黒豆、ベニバナインゲンなど五穀類をミックスした粉。栄養豊富で水を加えてそのまま飲用できる。

教育はもっと大切

私は故郷マレーシアからシエラレオネ共和国まで、飛行機を三回乗り換え、二十五時間かけてたどり着いた。その他のボランティアはアメリカのカリフォルニア州やニューヨークから来て落ち合った。

私たちは北部のルンギ国際空港から更に三十分船に乗って、やっと西側にある首都フリータウンに辿り着いた。船からは、水辺でたわむれる子供たちや洗濯する女性たちの姿が見えたが、海岸はゴミでいっぱいで、衛生観念の欠乏と環境汚染の問題が見て取れた。

マレーシアでも台湾でも、アフリカと聞けば貧困と不衛生、後進国を連想する。しかし、今の南アフリカを例にとれば、インフラが次第に完備され、一定の生活水準にあるといえる。

それ故、私はシエラレオネ共和国も南アフリカのように活気に溢れる現代都市だと思っていた。しかし、空港からホテルまでの道中、私の考えが間違っていたことを知った。空港から三十分も走らないうちにその国の困難が見て取れた。

私たちが目にしたのは、極端に粗末な家や路上で物を売る少年たち、そして、路上で這いまわる小さい子、ぼろぼろの服を着た子供と手で食べ物を口に頬張る子など、その全てに驚くばかりだった。そのような情景が国家の首都の随所で見られるのだから、遠く離れた地域の貧苦は想像を絶するものがあるのだろう。

私たちはクリニックと病院を訪問した

時、医療の乏しさと水準の低さを目にし、あらゆる部門が同じ問題を抱えていることを知った。看護人員が不足し、十分な医療設備も無く、その上公共衛生と保健教育の観念が不足していた。医師がなく、看護師が医師を兼ね、クリニックの管理だけでなく、患者のケアから妊婦の出産まで担当しているクリニックもあるのだ。

貧しい故に多くの妊婦や新生児、患者は充分に栄養をとることができず、病気や衰弱から回復することができない。今

●慈済ボランティアは4月にフリータウンの多数の医療機関を訪問し、医療人員不足と狭い病室、病床や医療施設の不足を認識した。

回、私たちが持ってきた五穀粉は彼らに大きく役立った。

二〇一四年、エボラ出血熱が広がり、二〇一七年は雨季の土石流と洪水で家々が流されたため、多くの子供たちが両親や肉親を亡くして孤児院に送られた。それらの孤児院は資金も人力も不足しており、慈善団体から贈られる資源に頼るしかなく、彼らは非常に不安定な生活を送っている。

しかし、生活がどんなに貧しくても、子供たちは楽しそうな表情を見せており、単純な生活が彼らの心を純真なものにしているのだろう。だが私は彼らを見て教育の重要性に気がついた。

比較的資源が豊富な孤児院に住んでいる子供たちは学校に行く機会があり、私たちと英語で話すこともでき、彼らの未来は比較的明るいように思えた。資源の乏しい孤児院の場合は大きな違いがあり、六歳になろうとしている子供が教育の機会を得られていないため、私たちとは手まね身振りで自分の意志を伝えるしかなかった。

慈善の効果

今回私たちは五年来、慈済が支援して

きた成果を目にすることができた。特に白米の配付は食料不足を補っただけでなく、支援を受けた住民の生活水準と安全性を高めていた。

ドン・ボスコ避難所は虐待を受けた子供や女性が暫く安住する場所で、二〇一七年にフリータウンが水害に襲われた後、慈済が長期支援する社会福祉機構の一つになっている。二〇一七年から翌年にかけて、慈済は約七千袋即ち七万五千四百五十キロの白米を贈った。今回、私たちは食糧援助がもたらした効果を見ることができた。

避難所に入ると、去年慈済が贈った米がまだ残っていた。それを見て非常に倹約して使われていることが分かった。そこで暮らす女の子や青年たちは米袋で美しい手提げ袋を作っていた。

今年、私たちはドン・ボスコ避難所に一缶七百グラムの五穀粉を九百五十缶届けた。慈済アメリカ総支部の曽慈慧（ゼンツーフイ）副執行長が、五穀粉は水を加えて飲料にしたり、凍らせてアイスキャンディーにすることができると紹介した。避難所で最も若いのは一歳と三カ月の子供で、母親に五穀粉飲料を粉ミルク代わりにして乳幼児に飲ませることができると教えた。

避難所は生活の場と食べ物を提供するだけでなく、子供たちに教育の機会と権利を与えている。かつて収容所の向かいにあったコミュニティーが大火で焼けた時、避難所は備蓄の白米を被災者に分け与え、住居再建にも協力した。

避難所の責任者ジョージ神父（Father Jorge）は、慈済が食糧問題を解決してくれたお陰で、余裕を持って新らたに避難所を設ける計画を進めることができ、より多くの虐待に遭った子供たちを助け

2019年 慈済シエラレオネ共和国支援計画

- コノート病院（Connaught Hospital）9号病棟18床の修理完了
- 五穀粉、白米、文房具、衣類の配付
- 環境保全教育
- 過去五年間の配付成果の検証と支援方向の査定

ることができると言った。また、ジョージ神父は土砂災害の被災者が住むための「ドン・ボスコ村」を建てている。敷地は三十三エーカーで今年末に完成する予定である。一方で安定した生活ができるよう孤児たちの引き取り先を探している。

神父によると、二年前、米が一袋しか残ってなく、四百人の子供がお腹を空かしており、何処から食糧を手に入れることができるだろうかとただ天に向かって祈るしかなかった時、その一秒後にカリタス・フリータウン基金会のピーター神父から電話で慈済が白米を贈ることを告げられた。慈済は天からドン・ボスコ避難所に与えてくれた贈物だとその時深く感謝したとジョージ神父が言った。

彼らには夢がある

土砂災害の被害者や孤児たちを住まわせる「ドンボスコ村」の環境は市街地の喧噪から離れて静かで設備は整っているが、住民の衛生上の常識不足で、至る所まだ雑然としている。

その村に住んでいる子供たちは学校に行っておらず、食糧の供給も安定していない。子供たちはジョージ神父と慈済人たちが来ると、とても嬉しそうに駆け寄ってくる。

七歳から九歳の子供数人が駆け寄って来て私に抱きつくと話し始めた。食事は一日たったの一食で、世話してくれるおばあさんが食事を作らない時は一日中何も食べないということが分かった。子供たちの両親は土石流で亡くなったが、彼らが一番期待しているのは学校に戻って勉強できることである。

たとえ学校に行けなくても美しい夢を持っている。私を囲んで、大きくなったら大統領や弁護士、医者、教師になるのだと興奮して言った。私は「大きくなったらきっと自分の希望通りの人になれるわよ。でも今から善良な人になりましょう。私たちがあなた達を助けているように他人を助けるのよ」と励ました。彼らは「できるよ」と微笑んで頷いた。

子供の幼い声は無比の堅い信心を表わしており、彼らがこのことを何時までも覚えていることを願った。

愛される子供たち

私たちはグラフトン（Grafton）地域のマハナヒム（Mahanahim）孤児院を訪問した。そこは障害児が多く、皆非常に痩せて弱々しかった。院内の設備は粗末で老

●4月、12の医療機関と避難所に五穀粉の栄養食品が届き、福祉人員と子供たちは慈済の長期食糧支援に感謝した。

朽化していると同時に、身体障害児や幼い子供の世話をする人手が不足していた。

孤児院管理者のカマラ（Melrose Kamara）女史は、「私は二十九人の子供を世話していますが、大部分が栄養不良です。慈済から贈って下さったお米と五穀粉で子供たちに栄養をつけることができたことにとても感謝しています。外に出て助けを求めることができないところへ、あなた達が来て下さったのです。感謝に堪えません。私は若くないので、誰かがここを引き継いでこの子たちを世話

●児童センターの子供たちは五穀粉の味に好奇心を持った。この食糧支援も彼らの栄養補給になる。

してくれ、教育を受けさせることが最大の望みです」と言った。

カマラ女史は、自分はもう若くなく、行動も不自由なため、慈済や協力してくれる団体に孤児たちの世話を任せたいこと、彼らが危機を乗り越え、健やかに成長して欲しいことを語った。

セントマリー・ファティマ中間ケアセンターは、慈済と協力しているカリタス・フリータウン基金会のピーター神父が運営している孤児院である。慈済が長期に亘って白米を提供することで孤児たちの食糧問題を解決しているため、セン

ターはお金を貯めて子供の通学用に車を購入し、また野菜や蛋白質の食材も買えるようになったため、子供たちはとても健康状態がよくなった。

私たちはその孤児院の子供たちが教育を受け、英語を話し、数字や文字、色、動物などを認識するようになったのを目にした。神父は子供たちととても仲が良く、心から子供たちのために尽くし、皆が常に善念を持つよう指導している。

●ドン・ボスコ収容センターは主に青少年を収容しているが、浮浪児や虐待を受けた子供たちも含まれている。責任者のジョージ神父は長期にわたって食糧支援してくれている慈済の人たちが来たことを子供たちに伝えた。

彼は「謙虚」や「感謝」、「愛」、「分かち合い」など、「今週の良い言葉」を教えて、子供たちに毎週、善の念を実践させている。また、彼は募金を集めて図書館を建て、孤児院の子供たちだけでなく地域の人たちにも開放することで、愛を孤児院の外にまで広め、知識で地域社会を照らしている。彼は奉仕が認められ、二〇一九年の最優秀慈善家賞を受賞した。

今回、慈済が支援やケアをしている施設を訪れた後、ボランティアチームは一歩踏み込んだ計画を打ち出した。今まで以上に現地の衛生面と住民の健康、子供たちの教育及び食糧補給について改善を模索したいと考えている。今年末には再度、白米と衣類、靴を配付すると共に、衛生教育を行う予定である。

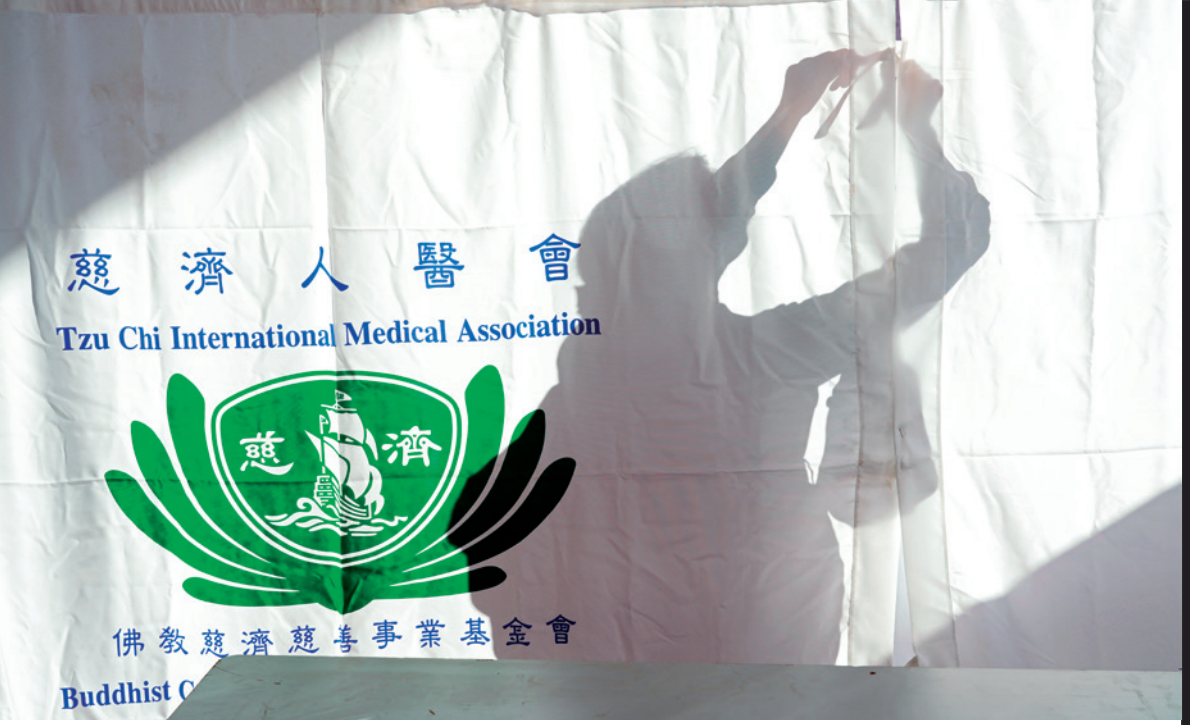
（慈済月刊六三一期より）

特別報道　モザンビークのサイクロン・イダイ被害

絶望から希望に目を向ける

◎文・何姿儀　撮影・蕭耀華　訳・葉美娥

僅か数日の施療で、どのような効果をもたらせられるのか。資源不足の中で暮らしている現地の子供を見て豊かな生活環境にいる自分と比べると、その切なさを感じる。しかし、アフリカであってもその他の被災地であっても、絶望ばかりを見るのではなく、希望に目を向けるべきだ。現地の実情をよく理解すれば、その粘り強い民族性のすばらしさに心から感銘を受けるだろう。更に寄り添いと励ましを続ければ、きっと彼らから無限の潜在能力を引き出せるはずだ。



十五世紀初め、中国明朝の武将である鄭和は、七回も南シナ海へ航海し、人類遠洋航海の歴史に新たなページを書いた。その艦隊の大きさと船員の数、航海した距離は歴史上稀に見るものである。それから八十七年後のコロンブスや一世紀後のマゼランも遠洋探検に挑戦したが、船員たちは多くが敗血病で亡くなり、帰還したのは僅か数人しかいなかった。

それに対して、鄭和は毎回二、三万人を率いて二、三年間掛けて出航し、殆どの船員は無事に帰還している。その主な要因は完璧な食糧補給と航海計画にあったという。鄭和の南海への偉大な実績は今見ても卓越したものである。

鄭和の軌跡はどこまで及んでいたのか。学術研究者は今なお探求を続けているが、モザンビークのベイラまでに行ったことは確かである。即ち、中国人と東アフリカの縁は遠い昔から結ばれていたのだ。

二〇一九年五月、慈済医療チームはサイクロン・イダイ被害の後、復興支援の一環として東アフリカ・モザンビークに足を踏み入れた。台中慈済病院の簡守信（ジェン・ショウシン）院長は「片道の時間が二日間に短縮されただけでも、十分にありがたいと思っています」と感想を述べた。

●簡守信院長は辺鄙な集落に往診した時、現地の公共衛生問題に関して、ボランティア団体が改善に協力できる道をを模索した。

六世紀の時間を経ているとは言っても、今回の使命は容易なものではないと簡守信院長は言った。マラリア、ＨＩＶ、結核などの伝染病のリスク、不便な交通、その他、物資が手に入り難いなど、その全てが今回の施療に難度を加えている。

「鄭和の短期間の友好的な訪問や他の国の植民地支配による略奪と違って、慈済人は世界各地からの祝福を結集し、有形の資源をもたらしただけでなく、無形の慈悲と大愛をアフリカに届けたのです」。簡守信院長は、この力と資源が地元ボランティアと結合したことで、何時の日か根を下ろし、成長して大樹となり、深く影響を及ぼすものと信じている。

愛は潮流の如く

一九九七年、簡守信院長が初めてフィリピンの海外施療に参加してから慈善災害支援医療に携わって二十年余りになる。彼の慈善医療ケアの足跡はインドネシア、パキスタン、ミャンマー、ネパール、カンボジア、メキシコにまで及び、益々遠くに出向くと共に、其の関心の角度も個別の症状から社会現象にまで広がっている。

今回の体験を彼はこう語っている。「愛は潮流の如く、潮流は単なる波ではなく、次から次へと押し寄せるものです。慈済人は次々と愛を現地に届け、現地の患者

も潮流のように、次々と集まって来ました」。誠意を込めて施療すると同時に、彼はさらに現地の公共衛生の問題点も発見し、将来、力を入れるべき方向を考えていた。

「現地の主食はトウモロコシ粉ですが、子供たちが栄養不良なため、豆類や穀類などを栽培して、優質なたんぱく質と栄養素を摂取できるよう指導しています。正しい衛生教育がなされていないため、胃腸や感染、そして出産率にまで影響しているので、そこから始めなければなりません。多くの年配者は物が見づらいと訴えていますが、実は老眼のせいで、複雑な眼の病気ではないのです。中古の老眼鏡を集めて、適切な掛け方を指導すれば、すぐにでも問題は解決できるのです」。

エイズとマラリアなどの伝染病が蔓延しているが、現地の医療体系は病気の診断や投薬に関しては十分な能力があると簡守信院長は言う。また、モザンビークの医療費は安く、民衆が負担できないわけではない。問題は近くに病院がなかったり、遠いところから病院に着いても医師がいないこともあるのだ。「地元の医師と取り組んで医療スタッフの育成をすれば、地元の民衆の健康を守ることができます」。

今回の災害は数百万の東アフリカ人の生活に影響を及ぼし、彼らの愛する家族や僅かな財産をも持って行ってしまったが、全世界の慈済人のケアと支援をもたらした。モザンビークでは蔡岱霖（ツァイタイリン）師姐（スージェ）とディノ・フォイ師兄の長年にわたって慈善活動を行い、現地ボランティアも呼応しているため、ケアを続けさえすれば、将来の潜在能力に期待できると簡守信院長は感性の中にも理性を持って肯定した。（慈済月刊六三二期より）

●施療チームが中部の被災地ベイラから南部の首都マプトにある「慈済の家」に戻ると現地ボランティアが熱烈に歓迎した。これらボランティアは今後の被災地での再建において最も重要な力となるのだ。

特別報道　モザンビークのサイクロン・イダイ被害

医者としての感慨
私たちを育んでくれた大地を癒す

◎文・謝明芳　撮影・蔡凱帆（南アフリカ慈済ボランティアイア）
訳・江愛寶

教育は人生を変える大切な一歩である。教育が成功すれば、人は疾病を予防することができ、将来、国を変えるチャンスが掴める。

大林慈済病院整形外科
許宏達（シュー ホンダー）医師

朝早く起床したので外は涼しかった。辺りに薪を燃している匂いが漂い、許宏達の心を暖めた。「そう、この匂いだ。帰って来たのだ」。八歳の時に南アフリカに移民し、学校も医者になったのも全て南アフリカで、れっきとした南アフリカ人だと自分は思っていた。三十歳近くになって台湾に戻り、その二十年後、再び彼を育てたアフリカの地に足を踏み入れた。子供の頃の思い出が走馬灯のように蘇った。モザンビーク・ベイラ市に着いたその日、アフリカの人が習慣的に燃やす木の匂いをかいだ時、本当に故郷を思う気持ちになった。

「アフリカという土地は、これほど多くを私に与えてくれましたが、私にできるお返しはほんの僅かでしかないのです」。大林慈済病院整形外科に勤めている許医師は、同僚の医師達がシフトの変更をしてくれたおかげでモザンビークへ奉仕に行くことができたことをとても感謝している。しかし、施療が始まると心が痛んだ。アフリカを離れて二十年になるというのに、数多くの伝染病は依然として存在している。例えばエイズだ。

「学校に行くことができず、基本的な教育が不足しているのです。彼らの考え方と衛生条件が変わらない限り、これらの

病気はなくならないでしょう」。許宏達はアフリカ人は教育が不足しているために、たくさんの人が性病に罹っていることに注目した。台湾では滅多に見られないが、アフリカではかなり蔓延している。

なぜアフリカには孤児が多いのだろう。彼らの両親の大半がエイズで亡くなっている可能性がある。「あそこの四十％は子供で、この子供達から教育を始める必要があります。教育が成功すれば、疾病を予防する能力を得られるのです」。

アフリカ人の人生を転換させるのは長期的なプロジェクトである。「證厳法師はそこに学校を建設することを決めました。これはとても重要な第一歩です」。許宏達は子供達が教育を受けることを切に願っている。そうすれば将来国を変える可能性が生まれるからだ。

一生、小児科医にはなれない

モザンビークの国土は帯状の形をしており、中部のベイラ市で使われる言葉は南アフリカとは全く異なる。許宏達も途方に暮れていると、幸いにも現地の三、四年生の医学生が通訳をしてくれた。診察を待っている人は非常に多く、一人の医師が複数の診療科を診なければなら

モザンビークのサイクロン・イダイ被害

慈済災害支援の統計

3月～5月 緊急物資配付

白米：553袋
食料と生活用品パック：10,285袋
建材と農作物種子パック：16,764袋
文房具：26,623人分

5月19～5月23日 施療活動

被災地で3回、首都マプト市で1回
診療科目：漢方科、歯科、小児科、外科、内科、産婦人科
患者数：延べ4,951人

中、長期支援

- 学校の修繕、増設、再建
- 集落の再建
- 病院の修繕
- 長期ケア

◎訳・善耕

ず、内科、外科、婦人科、小児科の全てをこなす必要がある。許宏達は幸いに南アフリカで診察した経験があったので、これらの疾病にも向き合うことが出来た。

一日目の施療の時、五歳ぐらい女の子が来た。遊んでいる時に友達に石を投げられて眉の横を怪我したのだ。整形外科専門の許宏達は数名の医療スタッフと一緒に傷口を縫い合わせた。麻酔注射を打ったその瞬間、女の子は一度うめき声を出しただけだった。「実は麻酔を打つ時はかなり痛いのですが、彼女は泣きもせず、縫合に協力的でした。本当に勇敢でした」。許宏達は子供達の運命を受け入れた忍耐力を見て、もし、その女の子が自分の娘だったら、大泣きしていただろうと言った。

お腹が大きい子供達を見ると許宏達は気が重くなるという。彼らは主食のトウモロコシ粉を食べて腹いっぱいになればそれでいいと考えているため、蛋白質が不足して栄養失調になっているのである。水分が腹部に蓄積してだんだん膨らんでいるのだ。

インターンだった時のことを思い出した。田舎へ診察に行ったある日、骨と皮ばかりの女の子が連れて来られたことがあり、早朝に看護師が慌てて駆け込んで

来て、女の子の呼吸が止まっていると報告したので、皆、急いで応急手当をしに行った。主治医も来ていたが、「もう救う必要はありません」と一言言った。「どうしてだろう?」と許宏達はとても困惑した。「餓死だからです」と主治医が答えた。

その答えを聞いて胸いっぱいに悲しみがこみあげてきた。子供好きな彼はその後、小児科医にはならないと決めた。「結局自分達は何もしてあげられなかったのです…」。その時の事を思い出すと許宏達は目頭が熱くなった。

アフリカから台湾に戻って慈済病院に勤めてから、彼は頻繁に施療と往診に参加しており、多くの身寄りのない一人暮らしの老人や病床に臥した病人に寄り添っている。彼には台湾と海外の区別はない。「私はただやるべきことをやるだけです」。

許宏達はインドネシアと四川省の施療にも参加したが、モザンビークは大いに違っていた。「先ず、私は『故郷』に戻って人々を助け、私を育んでくれたこの土地で役に立てたのです」。アフリカの人々の人生を転換させたいという法師の発願を聞いた時、そこで育った彼は絶対に機会を逃さないと心に決めた。（慈済月刊六三二期より）

お板さんが法の香に浸る

「辛」と「幸」の関係

◎文＆絵・阿板（凌宛琪）　訳・済運

こんな動画を見たことがあります：

ある教師が日本語の漢字を教えていました。幸福の「幸」から横の一本を取れば、即ち「辛（つら）（い）」という字になり、二つの字はとてもよく似ていると説明しました。

幸福から何かが欠けると辛い思いをします。しかし、辛い中でも何かがプラスされると幸せな気分になるのです。

教師は続いて「難」という字を書き、人生で「難」という字に関係することには何があるかと聞きました。皆、困難、災難……と答えました。すると教師は「有難」と書きました。これは日本語では「感謝に値する」という意味です。人は皆、人生で「（困）難」に遭遇しますが、それら諸々の事が感謝に値するのです。

そこで思い出されるのが大愛テレビ〈高僧伝〉シリーズの《智者大師》です。

慧思大師は「苦は目を覚まさせる良薬であり、悪を断ち切る利器である。何故辛いかが分かれば、自ずと苦しむことはなくなる」と言われました。

人は誰でも困難と苦しみに遭遇するものです。そのような時に人を羨むのではなく、自分の長所に目を向け、少しでも多く他人のために何かをしてあげようとするなら、皆、幸福を見つけることができ、感謝に値する人生となるでしょう。

（慈済月刊六二七期より）

●作者：凌宛琪（お板さん）。慈済基金会の職員で、毎朝の「法の香に浸る」朝会でＰＣなどの設備セッティングを担当している。そして自身の心得をイラストを添えてインターネットで発表し、分かち合っている。

いつも通り奉仕する

人生は無常であるが、心が変ってはいけません。
良い願をかけ、良縁を結び、真心で奉仕するのです。

◎文・釋徳仉／訳・済運

どうして私なのか？

ある慈済人が健康診断で悪性疾患と分かり、大きなショックを受けましたが、直ぐに仏法で心を落ち着かせました。上人はそれを聞いて、「直ぐに『なぜ仏は加護してくれないのか？』と思ったりしてはいけません。仏は自分を信じれば加護するとは言っていません。仏は衆生に仏法を心に聞き入れ、誰もが仏と同じように悟りを開くことができる本性を持っていることを知ってもらいたいのです。その仏心の本性を啓発しさえすれば自然と見返りを求めず人助けして、行動した後に喜びを感じ、どんな境遇にあっても心軽やかに自在でいられるようになるのです」。

上人は昨日、大愛テレビ局の職員が「九二一大地震」二十周年追悼のために作った回顧番組について話しました。その中で、地震当時は八歳と六歳だったある姉と弟が、当日の夜、両親とハグしてから寝たのですが、その数時間後に天地が揺れて家が倒壊し、両親と他の家族は全員亡くなりました。残された二人は悲しみの中、生きる術さえなく、隣人のおじさんが引き取りました。そのおじさんには四人の子供がいましたが、そこに二人増えたため、生活がとても大変でした。しかし、自分の子供のように育て、今、六人とも大人になり、皆、家庭を持つまでになりました。

「二十年前のあの瞬間、とても多くの人の人生が変わりましたが、これこそが仏法で言う『無常』なのです。人生は元々無常な故、心の持ちようを変えてはいけません。先程のお二人の話を聞いていると、病に対しても『何故私が？』と思ってしまいますね。この人生

の境遇は自分が過去世で書いた脚本です。それが逆境であっても、喜んで過去世と良縁を結ぶことです。今生、慈済の大家族の一員になり、これほど多くの法縁者が周りにいて、正のエネルギーを与えてくれると共に正しい方向に導いてくれているのです。今の医療は発達しており、病気が分かった以上、早く治療すべきであり、これ以上、人間に出来ることがなければ、天命に任せるしかありません。天命が私たちの縁なのです」。

「もし、手の付くしようがなくなっても、変わらない心を持ち続けるのです。もし、良縁があって生命が永らえれば喜び、過去の良い発願と良縁に感謝し、今まで以上に心して良縁を大切にすべきです。私自身も子供の頃から余り健康ではありませんでした。健康でなかった故に無常を悟り、生命を無駄にせず、皆に善行するよう呼びかけ、大勢の力と縁で以て一緒にこの世で奉仕してきたのです。誰もが変わらぬ心を持ち、良縁と共に時間を無駄にせず、正しいことを実践すればいいのです」。（慈済月刊六三三期より）

□地球にやさしい思考

大きな災害を経て、私たちはさらに己を戒め、よく反省し、災害の根源を探究すべきである。愛の心をもって傷ついた大地を守ろう。

（『地球と共に生きていく』より）

（撮影・蕭耀華　1999.09　台湾・九二一大地震）

平穏に暮らしている人がすべき事

◎口述、写真提供・謝恵芬
文・許鳳娟（嘉義人文記録ボランティア）
訳・李曉萍（明活）

小さくて弱い人類は、道路や建物ほど強固ではない。九二一被災地で断たれた道路や倒壊した建物と、無常の苦しみに苛まれている人々を目の当たりにすると私たちが住んでいる地域が安全で、家族も無事であるのは、幸運であるとしか言いようがない。平穏に暮らしている人はできる限り奉仕をしよう！

幼い頃の記憶は苦しみだけである。父は電力会社の外勤作業員で、給料は高いが、毎日仕事があるとは限らず、収入が不安定だった。そして、交友が広いため、家に持って帰るお金は多くなかった。私は長女で、一九六四年に生まれ、下に五人の兄弟姉妹がおり、学費を払う時は他の生徒よりも後で、いつも最後に納めていた。

母の大変さを見て、私達も分担したいと思い、小学校卒業後の夏休みに、お祖父さんの工場でコップ洗いやテーブル拭き等のバイトをした。月に三千元ほど稼いで母に渡して手伝うことで、母の負担を軽くした。

父は以前から浮気をしていたため、母は私を連れてタクシーで高雄や屏東辺りで父を探し回り、他の女と一緒にいる父を見つけて余計に怒ったので直ぐに喧嘩になり、母は殴られ、私を連れて家に帰ったことがある。小さい頃、大人の世界は分からなかったが、母が情のもつれに苦しんでいることには気が付いていた。

苦しみを味わって来た人は苦しみに対して格別に敏感である。後に慈済に入ってからは、苦難に喘ぐ人がこれほど多いのを見て、自分の幸せを大切にするようになり、ご飯が一杯あればその半分を他人に分け、誰もが食事に有り付けるようにしている。

誰も助けてくれなかったあの日

中学校を卒業した後、台南で裁縫を

●２０１８年、熱帯低気圧が嘉義に水害をもたらした後、謝恵芬は連絡所で被災者に届ける慈善プリペイドカードと證厳上人の祝福の手紙を準備していた。（撮影・楊國華）

学び、結婚は嘉義太保に嫁いで、一時期テーラーの仕事をした。一九九一年に三番目の子供を身籠った時、つわりが酷く、いつも実家へのホームシックにかかっていた。ある日、嘉義駅で《花蓮慈済功徳会の起源と成長》というパンフレットを見て、證厳法師がやっていることがとても偉大に感じると共に感動した。パンフレットの中に振り替え伝票が有り、その時から毎月、花蓮に

寄付するようになった。そして、親戚や友人、隣人を会員に誘い、七十名余りの会員を募った。

毎月二回発行する「慈濟道侶」を受け取ってから、慈済の委員が会員の家まで寄付金を取りに来てくれることを知り、とてもいいことだと思った。つわりの体で郵便局へ振り込みに行く時、自転車に乗りながら気分が悪くなったことがあったからである。ようやく取りに来てくれる人が見つかった。その人こそが古参の委員である謝錦綢（シェジンチョウ）師姐（スージェ）である。

一九九二年、錦綢師姐が私を慈済列車で花蓮に帰る活動に誘った。その時、会員から寄付金を預かる身として責任があり、慈済がしていることを理解する必要があると思った。精舎の「一日作（な）さざれば一日食らわず」の精神に感動し、自分の志を堅いものにするため、一九九四、正式に委員になった。

一九九九年に九二一大地震が発生した時、上下左右の揺れを長く感じた。その時、大変なことになったと思ったが、震源地がどこか知らなかった。深夜になっても災害状況が分からず、朝になってから災害が酷いことを知ったの

で、家にあったテントと寝袋を取り出し、隣近所から物資を集め、リサイクルトラックに載せて嘉義連絡所に行き、そこから鹿谷に向けて出発した。

東勢を通過する時に見た被害の状況は言葉では言い表せないほどひどく、地盤は沈下し、建物と道路の区別がつかないほどだった。鹿谷に着くと、道路の状況は悪くなかったが、土レンガ造りの家屋は酷く倒壊していた。途中で被災者のニーズに合わせてすかさず物資を配付した。車が止まると直ぐに大勢の人が寄って来て物資を持って行った。

当時、仕事の都合上、長くそこに居るわけにもいかなかったので、できるだけ多く話を聞いた。しかし、後で考えてみると、その日、彼らはとても助けを必要としていたのだ。

一人でも欠けてはいけない

震災後、慈済は台中、南投、雲林で一九ヵ所の仮設住宅大愛村、千七百棟余りを建設した。壁板を担ぐことや水や電気の配管工事のような重い仕事はできなかったが、私たちにできる仕事はあるはずで、例えば、掃除したり、鉄筋を運んだりするなどだ。そう考えてから、急いで被災地での奉仕を申し込んだ。

現場に行くと、本当に物を担ぐ仕事が多かったができることは全てした。被災地には宿泊する所がなかったため、多くの人は日帰りだった。現地に居れば、余震の怖さを感じ、最後にはどこに居てもいつも揺れているように感じた。

地元に住んでいない私たちがこんなに怖いのだから、被災者は尚更だろう。被災後、人によっては寝つかれなくなるし、怪我をしたり家族が亡くなったことで苦しみ続ける。私たちは医療関係者ではないので治療はできないが、せめて彼らに寄り添うことで悲しみを分かち合えるのではないだろうか。家族と離れ離れになったことの痛みや災害による心理的ストレスを少しでも和らげることができればと思う。

私たちの住んでいる地域は安全で、家族も無事であることがとても幸運だと思った。それよりももっと重要なことがあった。善行は自分一人でも欠けてはいけないし、誰もが他人を助ける人にならなければいけないのだ。被災地で再建の仕事があれば、周りの人を誘い、家族、親友、隣人を問わず、皆で手伝いに行った。

当時、私の子供は十代だったので学校に通っていたが、週末には彼らを連れて、

嘉義の二ヵ所の学校景観工事に参加した。現場で、私は自分の仕事をやり、子供たちもできる事をした。その後、写真を見て分かったのだが、息子はシャベルを持ったり、手押し一輪車を推したり、連結ブロックを運んだりしていた。

健康で平穏に過ごしている私達は一層奉仕して体得し、出来るだけのことをして被災地の人々をケアすべきである。努力を続け、彼らが安心して過ごせる環境になるようにし、心が落ち着くよう慰めていかなければならない。

●男性ボランティアは、９２１被災地で仮設住宅を建てる重労働をした。

●謝恵芬（シェフィフェン）の息子は１０数年前に９２１希望建設で造園作業に参加した。当時まだ１０歳だった。

人は天に勝てない

私たちが普段歩いている道路は広く、硬い。被災地で見た道路は盛り上がったり、亀裂のため歩けないところもあった。人類はこんなにも小さく、道路や建物ほど頑丈ではないはずだから、常に自分に警鐘を鳴らすべきである。

慈済に入って二十八年、良い事や正しい事であれば行うだけ、という初心から始まった。慈済の仕事とは人心を浄化し、平和な社会を達成することであり、慈

済人は名誉や利益のためにするのではなく、喜びを勝ち取るためである。人は困難に遭遇することもあるが、自分と世間を切り離して考えるのではなく、人の世の是々非々を教育と捉え、良い事に出会えば学び、悪いことに出会ったら、相手が悪い状況を見せてくれたことが自分への警鐘だと思って感謝するのである。

證厳法師の諭しを心に刻んで、自分を励ませば、次第に心が落ち着いてくる。それは法師が気力と勇気で以って模範を示してくれているからであり、私たちは精一杯奉仕するうちに心の中に「難しい」ことは何もないことを知るのである。「大きな願を掛け、志を堅くし、繊細な心で、人に優しくする」という静思語を座右の銘として、いつも心に銘記している。

幼い頃は家庭が貧しかったため勉強や習い事ができなかった。結婚後は家庭の主婦になり、慈済に入ってからパソコンやリサイクル作業、リサイクルトラックの運転を学んだ。九二一地震後、天災は避けることができず、お金がたくさんあっても頑丈な体があっても、無常に遭遇しない保証はないのだと悟った。災難を見て一層、謹んで自分を戒め、敬虔に日々を過ごしたいと感じた。

（慈済月刊六三三期より）

【證厳法師のお諭し】

回顧を冊子にして、人間（じんかん）の経典にする

◎訳・慈願　絵・林錦濤

歴史を回顧する時、
殊更慎んで戒めて敬虔になり、
現代の啓示と教育にするのです。
天地の間で生活するには、
規則や法の如く、
天を敬い地を愛してこそ
福縁が結集するのです。

今年六月から七月にかけての三十一日間の行脚では、慈済（ツーチー）の人たちと百五十六回もの心温まる座談会と開示を行うことができました。テーマは、「あの年を忘れるなかれ、あの人を忘れるなかれ、あの一念をも忘れるなかれ」です。半世紀以来、台湾の何処かで災害が発生すれば、慈済人はすかさず行動を起こし、数分後には現場に駆け付けていました。そして、心がどんなに痛んでも勇敢に苦難の人に寄り添ってきました。

皆で回顧して時代を見出し、断片を寄せ集めて、真実の歴史を残しましょう。数多くの話を聞く中、感動的なものもあれば、悲惨な過去もありました。それよりもあの人達が「聞聲救苦（もんしょうきゅうく）」（助けを求める声を聞けば直ちに救いに行くこと）をして恨みも悔いもなく奉仕してくれたことに感謝します。

今年は九二一大地震の二十周年に当たります。当時、激しい揺れが収まると、慈済人は地から湧き出たように、夜も明けきらないうちから、温かい食事や物資を被災者に提供し、身近な所からさざ波のように遠くまで広げていきました。そして、次々に行われた救援活動は被災地において拠り所となりました。

被災者の長期にわたる不便なテント生活を考慮し、自分たちの家が完成するまで少なくとも三年間過ごしてもらえるよう、急いでプレハブ式仮設住宅を建てました。借地して設計から起工するまで全台湾の慈済人が動きました。鉄骨フレームは一人では持ち上げられなくても、二人や四人、または六人で運ぶことはできます。女性はかがんで床板を敷くだけでなく、勇敢に屋根の上に上がってネジを締める作業もし、夜は地面に寝ました。

色々な話を聞いているとその苦労を思い忍びなくなりますが、皆の価値ある生命をとても嬉しく思います。当時の仮設大愛村の近くには、小川に小さな橋が架かる緑豊かな景観がありました。十二坪の屋内には三部屋と居間、ダイニングキッチン、浴室洗面台などが完備されていました。落成した時、皆に「家の広さよりも心の広さが大事です」と言いました。家は小さくても心を広く持てば、困難を乗り越えることができるのです。

続いて五十一カ所の学校建設という「希望工程」に移りましたが、充分な資金があったから引き受けたのではなく、テントの中で暑さや雨風に堪えて授業

をしている子供達の様子は見るに耐えず、また学びに適した学齢を考えると時間を無駄にすることができなかったからなのです。

今年六月、台中静思堂では希望工程の学校を卒業した青年たちが集い、時代の意味を見出しました。二十年前、彼らはテントの中で授業を受けた後、新しい教室に入り、そして卒業しました。今では社会で成功し、責任のある仕事に就いています。彼らを見ると、心から喜びを感じます。

私たちが被災直後すかさず支援し、幸いにもあの年に多くの学校を建設できたことは、あれだけ多くの慈済人がいてくれたからこそ、その力があったからこそ成し遂げられたのです。さもなければ、ただ一人でその心があっても、そんな力はありませんでした。

もしあの時すかさず支援に投入し、大愛村の建設、希望工程等の中長期支援を行わなかったら、今のように「あの年」を振り返ったり、同じ志を持った慈済人と深い縁を結ぶこともなかったでしょう。無私の人助けの行動は一念によって起きますが、それが一番大事なのです。皆が初心を持ち続け、時間を無駄にせず、絶えず開拓して生命の価値を高められるよう願っています。

もし、過去の一分一秒を無駄に過ごしていたら、今日の慈済志業は成就しなかったでしょう。「観身不浄、観心無常、観法無我（この身は不浄と観る、心は無常と観る、法は無我と観る）」。一分一秒たりとも留めることができない故、毎秒の「自分」を把握して、深く、広い歴史にしなければなりません。

一分一秒を繋ぎ合わせたのが年月です。回顧を冊子にしたのが慈済大蔵経であり、「時代を見出し、人類のために歴史を刻む」のです。そして回顧する時はもっと自分を戒めて敬虔にならなければいけません。地震には周期性があり、それを現在の啓示として若者たちの教育にするのです。天と地の間で生活している私たちは、規則や法の如く、誰もが法律を知ってそれを犯さず、物欲を善の念に変えることで社会が平和になり、天を敬い地を愛してこそ、福縁に恵まれるのです。皆さん、心して精進しましょう。

（慈済月刊六三四期より）

慈済大記事九月

訳・済運

09・01	◎台北市新聞記者クラブは2019年度「社会光明報道賞」の授与式を行い、「慈済月刊」のカメラマン蕭耀華の作品「愛の雫・東アフリカ支援」が報道メディアの撮影部門で優秀賞を獲得した。
09・02	「2019アジア太平洋気候会議（APCW2019）」が2日から6日までタイのバンコクにある国連アジア本部ビルで開かれた。慈済基金会アメリカ総支部、マレーシア・マラッカ支部から合計3名の職員が代表で出席し、アジアの気候に関する政策に理解を深めたほか、慈済のアジアに於ける環境保全活動を向上させるために、慈済と協力できる団体を募った。
09・05	◎インドネシア慈済病院準備委員会の医療人員とボランティアの計56人は5日から7日まで台北慈済病院で行われる「医療人文セミナー」に参加した。各科の医療人員、社会福祉人員、病院ボランティア、地域ボランティア及び医学生の後援委員などの代表者が講師やチームリーダーを務め、「医療人文」や「志を持った職業」、「我々の病院と法縁者によるケア」などをテーマに貴重な経験談を披露した。 ◎慈済基金会は5日と6日、中国深圳で開かれた第4回世界公益慈善論壇に出席し、各方面と交流した他、慈済の林碧玉副総執行長が第5セッションで「慈済慈善行動力の一帯一路における影響力」について語った。また、文史所の何日生主任が第3セッションのハイランク円卓会議で「善の経済的考え方と実践」について報告した。
09・06	ドイツ、イギリス、オーストリア、シンガポール、台湾からのボランティアはセルビア現地ボランティアと合流して、6日から9日までソンボール、クルニャッカ、シド、オブレノヴァックなどの難民キャンプ

を慰問し、難民の子供たちに372人分の学習用品を提供した。また、デルタエレクトロニクスのドイツ内子会社が廃棄予定コンピューターをアドセヴィッチとオブレノヴァックの2つの難民キャンプで使用できるよう贈与した。当会社は今年1月より既に5回慈済に協力して、コンピューターをセルビアの難民キャンプに贈与している。

09・11

「2019年国際慈済人医会年次総会」が11日から14日まで花蓮の静思堂と静思精舎で開かれた。今年のテーマは「慈悲は智慧を育み、人文は科学技術を育てる」である。世界25の国と地域から506人が参加し、エクアドル、モザンビーク、ブルキナファソ、シリアなどからも初めて医療人員が出席した。

09・14

◎慈済カナダ支部はグローバルメディックの要請を受け、30人のボランティアを動員して1000食余りの食事の包装を支援し、ハリケーン・ドリアンで大きな被害を受けたバハマの被災者に届けた。

◎新北市の謝政達副市長は各部署の職員56人を引き連れ、慈済双和連絡所とリサイクルセンターを訪れ、回収品の分別を体験した。新北市政府は慈済ボランティアが地域社会で「地域で健康且つ楽しく生きる5つの安心奉仕計画」を推進し、お年寄りに食事を提供してくれていることに対して、感謝状を贈った。

09・16

ポルトガル・トンデラ市政府は、慈済が2017年から継続して現地の森林火災被災者に寄り添ってきたことに感謝し、ドイツのボランティア・林美鳳が基金会を代表して「慈善及び利他主義メダル」を受け取った。

09・19

◎慈済大学で19日から23日まで模擬手術授業が行われ、慈済大学、シンガポール南洋理工大学、ポーランドポツナン大学、カリフォルニア大学サンディエゴ校などからの27人の医学生と慈済病院の医師34人が8人の無言の良師の体から43項目の基礎と応用手術を学んだ。23日に葬儀と感謝追悼会、納骨式が行われた。

	◎慈済基金会は中研院、中央大学、慈済大学、聯合報新聞社の「願景工程」コラムなどと共同で、１９日と２０日に台北慈済新店静思堂にて「第５回慈済論壇」を催した。自然災害に対する防災、災害支援、減災から人類と地球の永続的発展までをテーマに、アメリカ、日本、インドなど１０の国と地域から専門家や学者を招いて交流と討論を行った。
０９・２０	◎第７５期世界静思生活研修会が２０日から２２日まで開かれた。台湾、マレーシア、インドネシア、エスワティニなど９つの国と地域から４８０人が訪れ、台北、花蓮の志業体職員やベテランボランティアによる報告から慈済の精神理念や志業の動向について理解を深めた。 ◎慈済基金会は２０日から２２日まで中国深圳展示センターが催した「第７回中国公益慈善アイテム交流展示会」に招待され、「和気藹々の社会と親孝行・仁徳のある村は美しい」というテーマの下に、慈済による山岳地帯の貧しい家庭への助学金の提供や蘇州の紅豆杉計画、災害後の緊急ケア、孔蕩村への継続的なケア、素晴らしい環境保全などの活動に関する展示が行われた。
０９・２１	慈済基金会はアメリカ、ニューヨークにある国連本部で開催された第１回国連青年気象サミットに出席し、関連論壇を共催した。各国青年と共同で気候変動や温暖化対策などの議題や方法を討論した。
０９・２４	◎慈済インドネシア支部は再度、インドネシア国軍（ＴＮＩ）と協力覚書を交わした。双方は将来５年に渡って災害支援や人道支援、環境保全などの面で協力する。 ◎３月にインドネシア・パプア州ジャヤプラ県センタニ地区で発生した水害と土石流によってインフラと数百軒の住宅が大きく損壊した。慈済インドネシア支部は中長期支援計画として、本日、ジャヤプラ県政府と３００世帯の「大愛の家」建設に関する覚書書を交わした。

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779/886-3-8059966
志業中心（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段２４８号
TEL:886-5-5372000

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301

台北支部（新店静思堂）
231 新北市新店區建國路 279 号
TEL:886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路 2 号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989999
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ハワイ支部（Honolulu）
TEL:1-808-7378885

カナダ
TEL:1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL:1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル　Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス London
TEL:44-20-88699864

フランス Paris
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL:604-2281013
Malaka
TEL:606-2810818

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈濟

２０１９年１０月１８日発行・２７４号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 2 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・陳植英・王麗雪
校　閲　黒川章子
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）

明るい兆し

慈済はサイクロン・イダイの被災地であるモザンビーク・ベイラ市を支援している。現地の人は優しくてとても親切だ。好奇心旺盛な子供達がボランティアの行動を見ていた。

一今期の特別報道に関連記事を掲載。
（文、撮影・蕭耀華 2019.04.08）

慈済ものがたり